

小川尙義君著「原語による臺灣高砂族傳説集」に對する

授賞審査要旨

本書は臺灣高砂族にありて現在固有言語として行はるゝ十二種の蕃語につきて原語の儘に傳説二百六十三話を採集したるものにして、著者は之を記録するにあたりて精細なる音聲記號を用ゐ、且つ之に逐語譯を施し、又語法及び語原上の解釋を附註し、尙ほ之に添ふるに各傳説の全譯文を以てせり。更に進みて著者は右十二種の蕃語傳説集に毎篇、語法概説を附し、各蕃語の分布と音韻、形態及び品詞の特徴とを簡潔に説明したるの外、首めに總説に於て、蕃語の種類を三種に分類し、又蕃語とインドネジャ語との音韻、單語竝に語法を比較し、末に二百七十八個の基準語に由る各蕃語の單語比較表を附録して各蕃語相互の語彙上の異同を對照明示したるのみならず、別に語法分布圖一葉を添附して蕃語分布の概觀に資したり。

今之を通觀するに高砂族の傳説は從來汎くこれを採録して、纂譯彙集を試みたるものなきにあらざりしも、本書の如く多數の說話を原語の儘忠實に記録し、而も科學的音聲記號を用ゐて之に音聲學上の檢討を與へ、更に語法學上周密なる説明を附したる著述に至りては、學界未曾有の業績に屬し、著者が說話の採集にあたり盡せる多大なる努力と言語の説明につきて表はせる透徹せる分析力とは何人

も之を認めざるを得ざる所なり。又諸蕃語に於ける單語の調査は舊來既に試みられたるもの多く存すと雖も大抵不正確なる寫音法により、概して假名文字を用ゐて記録したるに止まるを以て、其の成果は學術上極めて不完全なるを免れざりしが、本書は寫音法の點に於ても亦進歩の實跡著しく、向後蕃語彙の研究に對して確實なる根據を與ふべきこと疑を容れず。且つ蕃語に於ける連語措辭上の様式と語法形態上の關係とにつきて、明晰なる知識を供したる點に至りては、著者の言語學に與へたる功績最も顯著なりとす。

本書は其の名傳説集を以て稱すと雖も、元來傳説の内容の討究を主とせしにあらず、専ら説話の言語學的研究を目的とせるものなるを以て著者が傳説の分解、分類竝に比較等に論及せざりしは、之を諒とすべきも、本書が毎篇の首めに各蕃語の分布を概説し又總説の首めに言語分布圖を附載したるにも拘はらず、各蕃語間の相互影響と親近關係とにつきての概觀を缺きたるは、聊か遺憾なりと謂はざるべからず。

然りと雖も、本研究が高砂族蕃語の廣汎なる範圍に亘りて音聲學的竝に言語學的研究を盡くしたる業績として卓絶せる地位を占め、以て今後各蕃語及び同系インドネジャ語派の研究に對して極めて重要な資料を供するものなることは疑ふべきにあらざるなり。